
あの頃に戻りたい・・・。

橘鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの頃に戻りたい・・・。

【Nコード】

N7666L

【作者名】

橘鈴

【あらすじ】

來と桜は小さい頃から一緒に、仲が良かった。

もちろん中学に上がった今でも。

そんな二人に、最悪な事態が起こる。

その事態により、二人は二度と話さなくなった。

來は、まだ桜と話したいのに、一緒に居たいのに。

もう、戻れない。

プロローグ。

なにがあったって、ずっとそばにいてくれて。

守ってくれて・・・。

そんな彼女がもう僕の隣には居ない。

分ってたはずだった。

叶うはずのない事だって・・・。

それでも、そばに居たかった。

彼女の隣で笑ってたかった。

でも、それを壊したのは僕だから、もう戻れない。

あのころみたいに笑いあって馬鹿みたいなことも出来ない。

どうして・・・こんなことになっちゃったんだろう。

ねえ、桜。

僕はまた、あの頃に戻りたいよ・・・。

桜は望んでないかもしれないけど、僕はそれを望む。

いくら反対されても、桜のそばに行くためなら何だって出来た。

だから、あの時も僕は・・・嫌われることを、選んだんだ。

プロローグ。(後書き)

さあ、しよっぱなから失恋です。
こういうの方が書きやすいかもです W

君が楽しそうに話すから

「来ーーーー一緒に帰ろ!!」

毎日、授業が終わって下校時刻になると僕のクラスに駆けつける桜。

いつからだろうか、そんな彼女が何か焦ってるようで。

僕の気のせいかもしれない、けど、いつも一緒だったから分かるんだ。

ああ、僕に嫉妬して焦ってるんだろうなって。

僕は男の子っぽい性格や見た目で男子の方が友達が多い。

多分、その仲良い男子の中に好きな人がきたんだろうな。

そんな考えを抱いていた。

それがある日、彼女の口から真実だと分かってしまった……。

「あのね、来、私好きな人がきたん……だ」

「桜が？へー、誰？んー、桜のクラスの奴？僕のクラスの奴？」

「來のクラス……」

「僕と仲良い奴なら協力……するよ？」

「ほんと!？」

「ええ、よろこんで」

本当は協力なんてしたくなかった。

桜とは小さいころから一緒で。

親同士が仲良くて家も隣同士だったからだとは思う。

いつからは分らないけど、桜が他の人と笑顔で話していると胸が痛くて、苦しくて。

僕の前だけで笑ってほしいって思った。

でも、その時僕はそれが恋っていう事には気付かなくて。

僕はもとから独占欲が強いから、『ああ、桜は親友だからこんなにも嫉妬するんだな』そんな風に考えてた。

それから数年たって小学6年生の時、修学旅行で同じ班の子が恋愛の話をしだして……。

僕はそういうの苦手だから聞いてただけだったんだけど、皆好きな人が誰かと笑顔で話していると嫉妬するって。

僕は男子と仲良くしすぎてそういう感情分からなくなってたのかな？その時、あれ、なんか僕にも見覚えあるなって思ってた。

『桜が、好きなんだ』って自覚した。

それから2年たった中学2年生の今。

僕は一人称が俺になった。

そして、俺と桜と、桜の好きな人——高坂

この3人で常に行動していた。

そして、夏休み終業式の前日、俺は桜に呼び出された。

そこで、桜は俺に

「明日、高坂君に告白する」

そう告げた

笑顔でおめでとうなんて言えなくて

「何で、明日・・・なんだ？」

「それは・・・もし返事が『いいよ』だったら夏休みずっと一緒にいたいなって思っただけ・・・」

「へえ、俺がいるのに？」

「來は！友達だから！でも、高坂君は・・・」

「そんなに高坂の事好きなの？まあ、あいつ良い奴だけどさ」

「うん・・・」

「そういえば聞いてないな、何で高坂の事、好きになったんだ？」

「誰かを好きになるのに理由も年齢も性別も関係ないよ・・・？でも、あえて言うなら、ね」

『性別も関係ない』

君は俺にそう言った、けど、実際俺が好きだと言えば拒絶されるだろう。

もし、高坂が桜と付き合うことになったら、笑顔でおめでとうなんて言えない。

二人のそばにいられない。

断るって可能性もある、けど。

その可能性は去年の夏休みに打ち砕かれてる。

高坂も、桜が好きだって……。

両想いの二人の間に入れるわけない。

わかってるわかってるそんなことわかってるんだよ!!

でも、でも、俺は、俺・・・は。

悩んで悩んで悩んで悩んで、答えが出たのが終業式の前日の朝。

嫌われちゃおう、そんなことが頭に浮かんだ。

想いを伝えたら壊れちゃう。

伝えなかったら俺が壊れちゃう。

俺はそんな現実から逃げだしてくて、『嫌われる』そんな選択肢を選んだ。

その前に、好きになった理由くらい聞きたかった。

「高坂君が、来と野球して遊んでる時の笑顔が、その、わかんないけどすごいかつこよくて・・・」

「え、え、え？」

「だから！来と一緒にいるときの高坂君の笑顔が好きなの！もう！伝わってよね！」

「っは、しるか!!」

「來のバカ！」

「つか、高坂好きな奴いるぞ。振られるの目に見えてるんだけど、俺」

「え・・・？」

「だーから、高坂好きな女の子いるの。桜振られる確率高いよな

って事」

「何で・・・？」

「は、何でって俺に聞かれても高坂の気持ちなんk「そうじゃない！何でそんなこと言うの！？来は協力してくれるんじゃないの！？なんで・・・何で応援してくれないの・・・？」・・・十分しただろ。一緒に遊ばせたし、そばにいさせた、これ以上何を望むんだよ、言ってみろよ。」

「・・・・・・・・」

「これだから、女ってめんどくさい。あ、俺も女か」

「・・・・・・・・・・ばかあっ・・・・・・・・！」

目に涙をためて俺を睨む彼女が可愛くてしかたなかった。

この、顔を独り占めしたいって思ってしまった。

自分でも分かっていたつもりだったけど。

こんなに彼女に溺れていたなんて、知らなかった。

「そんな目で言われても全然怖くない。高坂が本当に良い奴かなんて俺も知らない、もしかしたら変態とかそういう系かもしれない。襲われたらどうすんの？」

「高坂君は・・・そんな人じゃない」

「何で分かるんだよ」

「そんな人を來が私に紹介するはずない!!!!!!」

「なに、俺の事全部知ってますみたいなこと言ってんの？いつとくけど、桜は、お前は俺の事何一つわかってねえんだよ。うざい、そういうの。もうやめようよ、友達」

「嫌だ」

「桜が嫌でも俺が決めたんだ、もう二度と関わるな」

我ながら酷い奴だ。

なにも、ここまで言うことないじゃないか。

でも、理性が持ちそうになくて…。

その日から彼女は俺に、話しかけなくなった。

お前、最低だな

高坂と桜が付き合いだしたことは学校中にすぐ広まった。

まあ、性格も見えた目もいい二人だし、お似合いって事で高坂を好きだった女子も、桜を好きだった男子も納得したらしい。

・・・当然のように俺は高坂に呼び出されて、叱られたわけだけども。

「おい、來、ちょっとこい」

「あ、彼女といちゃついとけ、リア充が」

「お前時々意味分からない言葉使うよな」

「悪かったなPC依存で」

「そんなこと言いから、ちょっとこい！」

「あー、もうわかったわかった。頼むから叫ばないでくれ。今日オールして寝てないんだ」

「なに、またネトゲ？」

「いーや、お友達と通話？」

「？っけんな、気持ち悪い」

「ひっでっ！！」

あんな事があっても、高坂とは仲が良かった。

高坂「とは」ね。

桜とは1年くらい話してない。

親の前では仲良さそうにふるまってるけど、ね。

高坂の前でも仲良いよアピールはしてたけど、まあ、俺がああいう事ிட்டのが桜経由でばれてしまったらしく、呼び出しです。

校舎裏です、ベタな展開です。

「で、なに？」

「お前、中村のこと、好きだろ」

「何で俺が桜の事好きなの、いみわからん」

「じゃあなんで、俺に告白してきた前日中村とお前は喋ってなかったんだよ」

「喧嘩したから？」

「お前が喧嘩ふっかけた理由がお前が中村の事好きとしか考えられないんだよ！」

「おい、調子にのんじゃねえぞ。お前も中村も俺の事知ってるような口叩くな。俺はお前らなんてただの友達としか見てねえんだよ。俺は別に好きな奴いるんだよ」

唐突についてしまった嘘。

「誰だよ」

「は？」

「だから、好きな奴！！」

あー。

それは気になるよな、俺ってそういうの興味なさそうだし。

「ネットの、女の子。同性だから言えなかったんだよ・・・嫌われると思って突き放したんだよ！悪かったな！！」

もちろん、嘘である。

俺の好きな人は

いまだ中村桜、彼女だけだ。

「は・・・？」

「おお、学校一のイケメンが口あけて固まってる！写真撮って公開だ「ふざけるな」ごめんて」

「で、俺の彼女さんに酷いこと言ったのはそれが理由？お前、俺が桜の事好きだって知ってただろ」

高坂と桜は学校では名字呼びだけど、2人きりとか俺の前だと名前で呼び合うからムカつく。

ちなみに高坂の下の名前は優乃。

あの、某戦闘魔法少女のフェレットと同じ名前。

いや、人の嫁さん達とはなしよ（まで、までまで

「いや、傷つくの見たかったから？つか実際好きな人ってのも嘘だ

し。あ、お前等がうざいのは本音」

「
・
・
・
ろ
」

「は？」

「いい加減にしろっつてんだよ!!!!!!」本当お前最低だよな、クズd「うっぜ、なにこいつ」は!?!」

「お前こそいい加減にしろって意味だよ。なに、俺の事本当全部知ってますみたいなこと言って。いつとくけど、中村が女だから手を出さなかっただけで、お前は男だから手を出せるんだよ!!!」

あ、やべ、親に怒られる。

高坂の事殴った瞬間そう思った。

でも、それもいいかな、っていうのも思った。

だって、今の俺は頭を冷やすべきだろう？

自分が選んだ事…だけど、さ。(前書き)

あけましたあああああああああああああああああああああ
あああ。

全然実感がわかない！

そして作者はお年玉もらってテンションやばいです！↑

自分が選んだ事…だけど、さ。

結局、親学校に呼ばれて、怒られた。
で、親が急に提案してきた。

『仲が良くないなら、この際引越すか?』

心配してくれるのは嬉しいよ、お父さん、でも…。

『今までずっと断ってたのってあの子たちの事、でしょ?』

そう、だよ。そうだから、でも…。

「來、明日までに、考え決めとけ。」

「もう少し待ってほしいなら、それでもいいから、ね?」

「ああ、うん。分かったよ」

突然すぎるよ。

中学上がる前から決まっていたらしい。

それなら、早く言ってほしかった。

嫌われる必要なかった。

離れるのは嫌だ、でも見ないで済むのなら…さ。

でも、嫌われてるならいなくなった方が、楽なの…かな…??

自分で選んだくせに、何で泣いて…くっそ…やっぱ、嫌だ、よ…。

「い、やだ…俺は、僕は…あ、っく…ごめ、ん。ほん、と、に僕、
最低っで…っ」

「馬鹿」

「だ、れ…?」

「馬鹿じゃねえの、お前」

「東樹…?」

「ほんとに！お前は、一人で悩んで勝手に結論つけやがって。俺が、親友ってこと、忘れてね…?」

「あ、っごめ、」

「いいから、今は、誰もいないし、泣いていいから、我慢しないでいいから」

「っ。うあ、僕、どうしていいかわからなくて…」

「ああ」

「自分で、嫌われるって選んだのに、すごい、胸、痛くっ…て…」

「ああ」

「自分がっ、どれだ…け、最低か、なん、て分かって…けど、見られなくて、それ以上に胸が、苦しくてっ…」

「そうだな、好きな奴が他の奴みてるのは辛い、よな」

「東樹…?」

「転校する、のか…?」

「親は、転校時期はまだ、先だって…高校は向こうの受けてその時から行くって…」

「そ、か」

それから東樹はずっと抱き締めてくれて嬉しかった。

初めてだから、もういいって、泣いてくれて良いって言うてくれたのが。

僕は、間違ってたかった？

いや、間違ってた、けど。

でも、僕は、強くなろう。

応援してくれる東樹の恩返しとして、

あきらめることはできない、でも、

応援、できるように。

転校するまでの約1年、楽しむことにする…。

自分が選んだ事…だけど、さ。(後書き)

なにこの急展開／（＾Ｏ＾）／
作者も焦ってる。

え、東樹って誰!?

え、誰!?(おい

1年に1回の大イベントです

あれから少し時間がたって文化祭の季節になったわけですが……。俺のいる学校は文化祭が12月の初めにあるから結構めずらしいのか……？

まあ、わかんないけど。

あの二人と話さなくなってから、大体東樹と一緒にいる。

東樹つながりで友達もたくさんできた。

友達が増えたのは嬉しいけど、学校の用事以外であの二人と喋らないし姿も見ない。

自分が選んだけど、つらいなあ……。

でも、東樹は癒えるまでそばにいてやるよって。

桜好きじゃなかったら惚れてたかもな……。

そういや、東樹と話したのって喧嘩からじゃないっけ？

「初めまして、山本東樹です」

初めて、自分のクラスに転校生って奴が来た。

小学2年生の俺にとってはこれは大事件だったりもしたなあ。

「それじゃあ、えっと、窓際の一番後ろに座ってる優姫さんの隣ね」

まさか、転校生が自分の隣とか！？

そんな、そんな、って焦ってたなあ。

「よ、よろしく……？」

「お前、男みたいだな。ほんとに男か？」

「んなっ!？」

俺もざわついたし、クラス皆ざわついた。
その当時はまだ女の子でしたから。

無理して女の子っぽくしてたんだけど。

東樹は見抜いたっていうのか・・・？

でも、まあ、失礼でしょ。

ってことで俺がキレた。

「初対面でそんなこというか!？」

「無理してんじゃない。ほんと、男っぽいだろ、性格」

「それ・・・は」

「隠す必要ないんじゃないの、来」

「・・・・・・？」

「記憶力本当じゃないよな。3年ぶり?とーきだよとーき」

「あああああああああああああああああああああ!」

すいません、叫びました。

思い切り。

だって、幼稚園いらいの幼馴染が目の前に戻ってきたんですから。
びっくりですよ。

それから少しずつ昔の記憶思い出してきて、ね。

一緒にゲームしたり泊まったりと。

でも、中学上がってさすがに泊まりはなくなったかな・・・？

けど、小学校後半くらいから桜が好きだって自覚して、それでいっぱいいっぱい。

ずっと話してなかったけど、相変わらず、本当に俺の事全部見抜いてるみたいで。

俺が桜好きだってこともバレた。

でも、親友だろって言ってくれた。

本当、東樹はかっこいいよ。

俺の一番は桜だけど、2番は絶対お前だよ。

1年に1回の大イベントです（後書き）

はい、そこまで喧嘩っぽくではないですね W W
テヘツ ★

ちよつと、キャラの名前整理しますね。

主人公↓優姫來

相手↓中村桜

ライバル？↓高坂優乃

親友↓山本東樹

さて、どこに逝ったかな・・・。

昔から考えてた名前は・・・。

新しいキャラでてくるけど・・・名前が・・・O r z

今年ハマわる人、違うのかな

東樹。

東樹東樹東樹東樹東樹。

東樹・・・・・・・・・・。

あの、野郎・・・。

なぜ買い出しを・・・隣のクラスの奴と・・・。
し、かも。

桜ってなんでだよおおおおおおおおおおおおおお
おお。

あの野郎、殴る、絶対殴る、殴る。

「えっと、ガムテと食べもn・・・・っは!?!・・・・食べ物って・・・
完全にパシリか」

「.....」

はい、気まづい。

1年くらい話してないのに.....。

あれ、だな。

話すきっかけくれたんだよな。

どっちみち同じ高校いけそうにないし、な。

これが最後だと思って勇気ですか、うん。

「高坂と上手くいってんの?」

「.....」

「あー、うん、俺が聞いて答えるわけないよな、ごめん」

「分かんない」

「何が」

「高坂君も、來も、分かんないよ」

「どこが」

「どっちも大好きなのに、なんで一緒にいけないの？」

「それ…は」

言ってしまいたい。

でも、今言ったら余計混乱させる。

ごめんね、ごめん。

俺弱いからさ、逃げたいんだ。

もう、無理なんだ。

もう、演技して、嫌われるのも笑っているのも。

疲れたんだ……。

「來は、本当に私の事嫌いな…?」

「何でそんなこと聞くんだよ」

「本当にそうなら、もう、あきらめるから。近づかないから」

「本当、だよ」

「わかった……けど、私h「桜ーー!」高坂君…」

「んじゃ、俺教室帰るから」

「あ…」

ああ、駄目だ。

涙でてきそう。

強くなろう。

誰も傷つけないでいられるように、強くなろう。

ごめんね桜。

俺、もうつらいんだ。

桜の口から高坂の名前がでるだけでも、もう。

………末期か。

末期症状でてるのか。

そうか、俺……終わったか。

いや、冗談言える状態じゃないんだけどさ。

そういうことを考えてないとやってけない。

今年の文化祭は

一人ですごそう。

頭、冷やしたい。

今年ハマわる人、違うのかな（後書き）

だあああああかああああああらあああああ。
展開。

展開。

早いから。

ホント。

って思うんですけどね。

こつから本当に

長いですよ。

はい、それだけです

そんなこと、急に言われても、なあ……。

「來、バンド演奏しようぜ」

「はい？」

「だから、お前、ドラムできるじゃん？」

「できるってほどじゃないし……」

「いいからいいから、最後まで聞けって」

「はいはい」

「俺はベースやるだろ、んで、ギターとヴォーカル2人知り合いに
いるんだよね」

「ほう、東樹にそんな知り合いがいたとはね」

「いや、俺お前より友達多いから」

「そーですね、僕は友達少ないですね！」

「怒るなよ」

笑顔で言うな、笑顔で。

桜と話して教室はいつたらこれだ。

ふざけるな、文化祭まであと2週間だぞ、2週間。
間に合うわけないだろ、考えろ、馬鹿。

大体な、話したこともない子と上手くいくか…はあ。

「人見知りってことはしってるよ。でも、本当に良い子だぞ。二人とも女の子だし」

「ああ、そっかお前モテるんだっけ」

「……………お前が言うな」

「は？」

「なんでもない」

いや、声ちっさ。

何言ったか聞こえないじゃん。

まあ、いいけど。

東樹は高坂の次にモテる奴で。

というか何で僕の周りには見た目良くて性格良い子ばかりなの。なんで、真逆の人達が集まるのさ。

「それでさ」

「何…？」

「今日、帰り一緒に帰らないか…？」

「何で」

「その子たちと帰るから、今のうち話しておけて事」

「え、なに、決定事項なの！？演奏って！？」

[illegible]

クラスに僕の声が響きわたりましたとき、めでたしめでたし。ってまで。

人が暗い気持ちの時に…。
もう…。

けど、こないだの借りがあるし……。う、受けた方が良いのかな……

「ちなみに」

「ちなみに？」

「拒否権はない」

そんな、爽やかな笑顔で言われても。

待ってよ。あのね、その、美少年に笑顔見せられるとね。
こう……………

イラストと来るんだよね。

理由…？

【女子にもてる要因】

だからに決まってるじゃないですか。
後は

【女子の嫉妬が怖い怖い】

ですよ。

今も睨まれてるし、女子に。
はあ……。

「無自覚なのも大概にしろよな」

「誰が無自覚？お前？」

「はああああ……もういいわ」

「んなっ」

無自覚？

僕が…？

どこが、滅茶苦茶自覚してますけど。

あまりにも男子と仲良いと女子からの嫉妬が…ね。

だって、性格とか…。

それに、女子の話題分らないし。

何ジャニーズって食えんの。

というか最近東樹がおかしい。

よく、発言を濁すというか誤魔化すというか…。

んー…何でだ？

「んで、その、女子二人の名前と性格とか、なんだけど」

「ふむ、スペックは必要だな」

「…………えっと、中村と同じクラスの、新井奈々、ヴォーカルでかなり可愛い。性格は結構ってかなり天然入ってて、好きなこと以外はかなりドジ。もう1人があそこで男子と女子に囲まれてる委員長の野田玲」

「え、それりょうつて読むの？」

「なんだとおもったんだよ」

「あきらかれい」

「……まあ、いいや。んで、性格は結構おおざっぱ、心広い。んで、備考として、両性愛者」

[illegible]

「優姫ーうるさいから」

「いたっ」

「お、さっそく登場委員長」

「え、なに？私の話してたの？」

「そうそう、両性愛者って情報言ったらコイツ叫びやがった」

「まあ、そうなるんじゃない？まさか同級生が両性愛者ってのはさ」

「そうかあ？」

「普通そうでしょ。東樹が珍しいだけ。あ、優姫、もしかして引いた…？」

「…全然。百合？むしろもっとやってくださ「黙れ」はい」

「優姫っておもしろいよね。急に叫んだりさ」

そんな笑顔で言われたら。

ちよっとドキってなったじゃないか。

美少女だし、美少女だし、美少女だし。

女子の笑顔は何でも可愛いと思う。

え、なにこの男思考。

でも、やっぱり、桜の笑顔が…。

最近見てない…。

みたけど、でも、あれは、高坂への笑顔であって、僕じゃなくて…。

「なに、暗くなってるんだよ」

「本当、一人で悩みすぎなんじゃない？」

「何で委員長にまでそんなことを言われなきゃいけないのさ」

「委員長だから、クラスメイトは心配なんだって」

「それは、嘘だな」

「嫌だなあ、東樹」

「ん??」

なんか二人の間に火花が見えました。

ってか委員長ギター出来たの…?

桜の笑顔、もう見れないのか。

想い返したら、もう、元戻りできないじゃん…。

最近後悔することしか…言っていないよ…。

そんなこと、急に言われても、なあ……。　（後書き）

あ
あ
・
・
・
・
冬休みが
・
・
・
○

明日から学校なので投稿が…。

いや、暇人なので頑張ります！

これからも呼んでくれるとうれしいでS()()()

初対面だよね、俺たち初対面でしょ!?(前書き)

テスト期間でした。

更新できなくてすいません!

・・・そして、今、親がいらないからいいんですけど・・・。

PC・・・禁止・・・いわれ・・・はあああああああああ
あん↑

初対面だよ、俺たち初対面でしょ!?

「はい、じゃあ、自己紹介!」

「あ、新井・・・奈々・・・です」

「野田玲です」

「優姫來です、よろしく」

「...野田以外硬いぞ...?」

「当たり前だろ!初対面だぞ!」

「奈々ちゃん・・・だっけ?よろしくね?」

「あ、はい・・・」

「可愛いなあ。ね、携帯持ってる?アドレスとか、交換しない...?」

「あ、持ってます。ちょっとまってくださいってあ...」

「あー、落しちゃったね。私とってくるよ」

「あ、ありがとうございます」

...俺の目には、委員長が、新井さんを、口説こうとしてるようにしか見えませんでした!

ドジっていうのは本当みたいだ。

携帯を鞆から出すとき手を滑らせちゃって柵の向こう（運動場）まで転がってったからな。

いやあ、え、え？

委員長×新井さん：やばい、萌える↑

って、いけないいけない。同級生をそんな目で見ては駄目だ。

「えーと、壊れては…ないみたい。よかったね？」

「は、はい」

「ねえ、優姫…この子って…ものすごい、受けキャラよね」

「俺に振る！？」

「お前らな…」

「…確かなー。誘い受け？はたまた策士…いや、後者はないかな…」

「そうよね、んー。なんだろう、こう、緊張してるところが、また」

「おいおい、初対面だぞ」

「いい加減にしろおおおおおおおおおおおおおおおお」

『東樹、なに大声だしてるの？』

「ははは…」

「新井が思い切り引いてるから、やめろ」

「あ、ごめんね？」

「い、いえいえ」

「つか、敬語じゃなくて大丈夫だぞ。二人ともいいやつだから」

「けど…」

「敬語使ったらキスしちゃうよー？」

「おまつ！」

「おお！」

「ええ！？」

「三者三様の反応でおもしろいわ」

何だ、百合フラグ k t k r と思ったのに。

つか、俺なんでこんな百合好きなんだ。

あれか、ネットで相談とかしようとしてるときにはまったんだっけ？

…楽しい、けど。

この会話は、楽しい。

初対面なはずだけど、楽しい。

でも、ここには桜はいなくて。

もう、ふざけたり、笑いあたりできなくて。

この時俺は

『ああ、本当にいつちやっただろう』
再びそう思った。

初対面だよ、俺たち初対面でしょ!?(後書き)

・・・更新速度。

遅くなりま・・・す。

いやぁ・・・。

登場人物紹介とか、文化祭が終わったらかこうかなって思ってるんですけど、どうでしょう？

いらないですかねー・・・。

いや、だからね、初対面・・・もういいです。

「えっと、奈々ちゃんって呼んじゃってもいいよね？」

「う、うん」

「俺はー、新井でいいや」「名前で呼んであげなさいよ」ええ・・・」

「わ、私はどっちでもいいよ？」

「來

優姫」

「ああああ、わかったよ！んじゃあ、奈々・・・で、いいの、か？」

「うん、いいよ？」

「緊張しすぎだから」

「ヘタレだな」

「お前ら笑うな！仕方ないだろ！女子の名前なんてめったに呼ばないんだから！」

「じゃあ、私も名前で呼んでよ。委員長じゃなくて、ね？」

「っ・・・えっと・・・りよ、玲・・・」

「・・・っ、そ、それでいいの」

なに、この子。

可愛い。

ヘタレで人見知りっていうのは知ってるけど。

こんな、照れながら名前呼ばれると。

やばい、可愛すぎる。

普段男なくせに、なんでこういうところ滅茶苦茶可愛いのだよ。

…しかも、私のこと覚えてないし。

……それもそうか、優姫の中には桜しか、いない、もんね……。

「さあて！喫茶店でも行く？」

「おい、委員長。それは、さすがに……」

「あー、それもそっか。じゃあ、私服に着替えてー、学校近くの喫茶店に集合ね！」

「い、いきなり!?」

「私はいいよ？」

「じゃあ、
けっ
てーい！」

「ちよ、待って、俺の、お、俺の意見は！？」

『來に拒否権ねえから

優姫に拒否権ない』

[illegible]

え」

：たとえば、優姫の中に桜しかいなくても、それでもいい。
この時間が楽しめるなら。

私は、それでいい。

この子が私を見てくれなくても、私は、いい…。
笑顔を見れるなら、それで。

いや、だからね、**初対m**・・・もういいです。**(後書き)**

過去話、喫茶店でのお話は、次回。

今日の更新はここまでです！

親かえってきそう・・・w

過去。前半（前書き）

：受験生になりました。
週末とかに頑張って書きます。

過去。前半

「桜、ちょっと忘れ物した！取りにいつてくる！」

「え、來？さっき忘れ物してないって…」

「いいからいいから！ちょっと待ってて！」

そういつて僕は桜に背を向けて走る。

理由？

忘れ物をしたからじゃない。

じゃあ、何で？と聞かれたら。

答えは一つ。

「こういうことだよ」

そういつて僕は思い切り教室のドアを開けた。

それはもう、勢いよく、全力で。

開けた先には…

「な、なに!?!」

「優姫? なに、文句でもあるの?」

一人の女の子を5, 6人の女の子がいじめているという光景。

すごい、見えて不愉快だ。

でも僕は皆がいると行動できないから、今、覚悟を決めてきた。

今なら、いじめっ子といじめられっ子しかない。

大丈夫、言える。

「やめてあげなよ。それ、いじめっていう奴だよ」

優しく言ったつもりだけど。

むかついたらしく、女子は反論してくる。

「はあ? 何、あんた。正義面?」

…誰だっけ、名前忘れた。

というか知らない。

「違う」

即答で答える。

「じゃあ、なんなわけ？」

いら立ってるようで、カッターナイフを右手に持った女子一人が荒立てる。

「…あー、はっきり言えばいいんだね。君達がやっている行為は犯罪だ。刑務所って言うか少年院とか施設とかに入る事になっていいなら続けられ？
それが嫌なら今すぐ帰れよくそ野郎」

初めて真顔で暴言を吐いた。

女子に対して。

初めて暴言を吐いた。

さすがに野郎はないんじゃないかな、とは思ったけれど。

そんなの今じゃお構いなしだ。

「はあ、意味分かんないんですけど、調子乗らないでくれない？」

「っな!？」

カッターナイフを持った女子一人が僕に切りかかってきた。

文字通り、カッターを僕に向けて振り回してきた。

あれ、日本語合ってるかな？

そんなのんきなことを考えつつ素手でそれをつかむ。

「うわ、結構痛い」

掴んだ後の第一発言がコレ。

さすがにどうよ、自分。

「は、はなしなさいよ!！」

あー、血がすごい垂れてる。

「怖いならやめなよ。僕が止めるのは正義とかじゃない。女子が女子を傷つけるなんて見たくない。不愉快だ。それに、こんなことしたら、将来引きずることになるでしょう？」

そう、笑いかけたんだけど。

逆に怖がられたみたいで逃げて言っちゃった。

なんか、負け犬の遠吠えって感じの発言してたけど、どうでもいい。

そんなことより今は。

「えっと、林さん？だっけ。大丈夫？」

いじめられていた女の子に、そう声をかけた。

過去。後半

「・・・そういうこと、か」

後ろから桜の声が聞こえてあわてて振り返ると扉にもたれかかってため息をついている桜が居た。

待ってて、って言ったんだけどなあ。

「…來、手見せて」

「いや、大丈夫だって。今すぐ保健室行くから桜が見る必要はっ…」

カッターを素手で掴んだんだ、傷跡は酷いに決まってる。

そう思って桜に見せまいと後に隠したのだけれど。

その思いと行動は虚しかった。

桜に右腕を（握った方）を掴まれて目の前に出される。

「っ…」

「…これで、大丈夫って言うの？痛いんだよね？私腕掴んでるだけなんだよ？」

後半は泣きそうな声で、それでも強い口調で言ってくる。

…あー、そっか。

僕は、心配をかけたんだ。

「ごめん…」

謝らないと。

「ありがとう」

お礼も言わないと。

「まったく…。はあ」

桜も機嫌を直してくれたみたいで呆れながらも腕を離してくれた。

「玲ちゃんだよね？」

「はい…」

さきほどまでいじめられていた女の子。

うつむきながらも答えてくれた。

「転校、するんだよね」

「はい…」

二人とも、泣きかけてる。

…桜も林さんも、いじめとかが原因じゃなくて。

ただ、純粹に、悲しいんだ。

友達だったんだ。

桜と、林さんは。

「また、会える、よね？」

「はい」

「その時は敬語、やめてくれるよね？」

「…っが、頑張ります」

後半は笑顔で話してる二人が。

涙を流しながらも笑顔でいる二人が綺麗だなんて思った。

そこで、僕の意識は途絶えた。

ああ、玲あたりにこっぴどく怒られる。

そう思いつつ、着替えた後もうダッシュで喫茶店に向かった。

「はあ、はあ…ごめ、遅れた…」

さすがに全力疾走は疲れた。

そこまで近くない距離だから時間がかかってしまった。

「…來、寝てた？」

「え？あ、うん」

何でわかるんだ、と思いつつ席に着く。

「來はこっちでしょ」

東樹の隣に座ろうとしたら玲に腕を引っ張られて奈々と玲の間に座らされる。

もともと4人用のテーブルなのに、片側に三人も座ったら狭いわけで。

いや、まあ。

女の子二人なのでそこまで狭くはないけれど。

「來、なにボーっとしてるの？」

右側から玲の声が聞こえてそっちの方を向いた。

…そこで違和感。

どこかで、見たような。

見てないような。

記憶の片隅に、この雰囲気というか、笑顔。

…どこで、あったっけ。

そう思いつつも、気にせずに答える。

「んー、寝ぼけてるだけだと思う」

「相変わらず、話に聞いてた時と全く変わらないわね」

すごい爆笑されてるんですけど。

ていうか、誰に話聞いたんだろ。

と、聞こうと思ったけれど左側から裾を引っ張られた。

「ぬぁ、何？」

「え、えっと…メニュー…」

「あ、ありがとっ」

なにこの子可愛い

と、思って笑っていたら右側から抓られた。

何で!?

「何で!？」

思うのと同時に発言していた。

「別に…」

「えへへ…」

…えっと、どうしてこんな状態に？

左側の奈々は笑顔。

右側の玲は不機嫌。

どうゆうことなの。

「ほんっとお前って鈍感だよな」

東樹にそう言われたけれど見覚えがなくてとぼけるしかなかった。

やばい、寝てた。(後書き)

今日の更新はここまでにします。

フラグって何さ（前書き）

受験生なんてなかったんや（白目

フラグって何さ

「えーと、取りあえず玲は機嫌直して」

「いや」

ええええええええええええええええ

「ええええええええええ！？」

思考と発言が一致した。

「うるさい」

「すいませんでした」

玲は機嫌直してくれないし、奈々は袖掴んでて可愛いし。

もう。

ハーレム状態だよね！

子子子。

「なに、にやにやしてんの？」

…

「りよ、玲？」

「…はあ、もういいわよ。諦めるわ」

「な、なにが！？」

何か飽きられてる！？

そして呆れられてる！？

「來…あの…」

「へ、なに？ 奈々」

「あう…」

…隣は天使でしょ。

もう片方の隣も天使でしょ。

「なにこれ、モテ期？あ、違う。分かってますはいはい！！」

「來、お前、なんだよ、急に」

「いや。ただ隣の二人が可愛くなって！思っただけだよ！」

と、発言した瞬間に二人が顔を赤くした。

そんなに嫌だったかな…？

フラグって何さ(後書き)

ストーリーが進まない件

曲決め

「さて、そんなことは置いといて。曲決めしない？」

ああ、本題ってそれだったっけ？

「そう、だなあ…アニソンって言うとは絶対なあ…」

「アンチ沸くわよね」

え？

え、なにになに。

動画うpするノリ？

あ、違うか…。

「奈々ちゃんが、文句言われるのは私として嫌、なのよねえ」

「あ、そういうことね。それは俺も嫌」

文句言った人は裏でつぶしますけど。

「來、お前、変なこと企むなよ…?」

「え?は?何言ってるの東樹あははははは!」

・
・
・

3人が一斉に黙りました。

で

す

よ

ね

「じよ、冗談はさておき。曲、アニソンつつたら○ルデ○ってのが歌ってる曲とかは?一人たないけど」

「ま、ギターは一人でなんとかするわよ」

「玲かっこいい！」

「ほんと？ありがとう」

不意に笑顔を向けられた玲にドキッとした。

けど、何か引っかかるんだよ。

どこかで見た笑顔。

とても、綺麗な…。

—

「さて、演奏曲が決まったわけだが」

東樹がさっそく仕切る。

「そうね、この曲、文化祭までに間に合わせるわよー」

相変わらず気楽な玲。

「が、頑張ります」

敬語になっちゃってる奈々。

…。

これが、俺の新しい仲間、というか行動を共にする人達、かぁ。

桜の事は好きだ。

これは変わらないんだ。

でも、なんだろう。

……。

少しずつ、変わってきてる気がする。

曲決め（後書き）

ふふふふふふふふふふふふ。

更新してなかったせい何か創作意欲がふふふふふふ。…すいませ
んでした

あ、そうそう、

作者もドラム始めたよ！↑

夢。

「ねえ、來。私の事、好き？」

これ、いつの事だ？

「私はね、來の事好きだよ？」

ああ、結構小さい時か…。

「來がね、私の事好きって言うまで私頑張るからね？」

この発言にどんな意味合いが込められていたのかは俺は知らない。

けど、きつとただの友情なんだろうな。

だって、高坂の事、好きになってるから。

俺なんて、目じゃないんだよな…。

「ねえ、來。私ね、いつかこの世の中が綺麗になればいいと思う」

たまに、難しいことで俺を困らせた桜。

「來、好きだよ」

そうやってはにかんで俺をドキりとさせた桜。

「もう、來のバカ」

俺を、本気で怒った事がない桜。

ああ、なんでこんなこと。

こんな夢見てるんだろう。

どうして、俺は…。

彼女を好きになったんだろう

「來ー！ご飯」

「へ？」

いきなり近くで叫ばれて飛び起きる。

あ、そっか。

家に帰ってきてたんだっけ？

c r o w ○ ○ ○ gの練習もしなきゃいけないのに。

解散してすぐ寝るなんて…。

オールしたからかな？

そんなことを考えている俺に、とんでもない言葉が聞こえた。

「あ、そうそう。桜ちゃん来てるわよ？」

大きなイベント前に、事件発生かもしれない。

**夢。
(後書き)**

やっと展開進んだね！
ってことで作者はこれからドラムなので続きはまたこんど！

急展開。(前書き)

元から、決めていた内容ですが、人により、なんだこの展開と思う可能性があります

急展開。

どうして桜が？

なんてことは考えてる暇はない。

親に不審に思われないよう、行動は…まあ、今更遅いか。

「…」

この状況は、嫌いだ。

「あー。えーと？」

「來、ちゃんと話し合ってほしいんだ」

そういうこと。

桜と仲が悪くなった原因は分からないけど、親同士として困るから。
みたいな感じか？

「あー、了解」

「じゃあ、お父さんたちは出かけるから、帰ってくるまでに決めてくれ」

「うん」

ここまで、迷惑かけちゃったら。

そうだね。

全部、伝えて。

終わらせようか。

そのほうが、辛くないと思うんだ。

「じゃ、まあ。親の頼みだし、話し合い、っていうのをしますか」

「…」

黙ったまんまじゃ

「それじゃ、進まないんだけど…。あー、うん。俺の考えとか全部言うから、その後に質問やらなんやら言ってくれ」

「分かった…」

これで、終われる。

やっと？

いや。

逃げるのを、やめたってことにしておこう。

「俺は…。僕は、桜が好きだった。恋愛と言う感情で」

その発言に驚いてこちらをみる桜。

気にせず、続ける。

止まってしまったら泣いてしまうから。

「だから、高坂と上手くいくところなんて見たくなかった。だから、遠ざけた。性別なんて関係ないって桜は思ったけど、けど。僕が気

持ちを伝えたら逃げるでしょう？」

一般人はそうなんだよ。

たとえば、本当に思っているけど、いざ自分に来ると逃げちゃうんだ。

「ずっと、ずっとさ。桜の事好きだったんだ。だけど、もう、叶わないなら嫌われて逃げてしまおうって思ったんだ」

桜の顔が辛そうに歪む。

そんな顔させたくないのに。

「僕は、桜の事が好きでした」

「…っ。それは、でした。なの？」

「…」

でした。

これは過去を意味する。

今は、分からないんだよ。

分からなくて、分からなくて仕方がないんだ。

「もう、好きでは、いてくれないの?」

「え・・・」

桜の発言に固まる。

どうゆうこと?

それは。

「だから、來は、もう。私をそういう感情で好きではなくなっちゃったの?」

「わかんない」

好きだ。

でも、それがそういう感情かどうかは、わからなくなってしまった。

自信が消えてしまった。

「…來の話は終わり？」

「あ、うん」

「じゃあ、私の話」

泣きそうな声で、けれど震えてはいなかった。

泣いてしまっている僕とは全く違った。

「私が好きなのは來、だけだから」

「え…？」

「最初から、あれは、全部高坂君と計画した、内容で…だから…」

そこからの、桜の話は聞いていたようで聞いていなかったような感覚だった。

高坂が桜へ告白したとき、桜は高坂へ、気持ちを打ち明けた。

その後、二人はある、計画を思いついた。

それは。

「私たち（俺たち）が付き合ったことにして反応を見よう」

これを、來は思い切り本気で受け取ってしまい、今の状態になってしまった。

桜があの時いいかけたのは、こういうことだった。

そう、気づいた來は混乱して混乱して。

頭に浮かんだのは。

玲と奈々。

そして、桜。

三人が同時に浮かんだ。

つまりは、そういうことだ。

そういう、ことか。

「僕が、好きなのは」

この3人ってことか。

「…今は答えられない」

答えられるわけがない。

こんなの自分勝手すぎるから。

だめだ。

いつか、ちゃんと決めないといけない。

高校へ行くまでに、決めてしまおう。

決めてしまう？

いや、それは違う。

桜が帰った後、來は一人自分の部屋でつぶやく。

「不真面目すぎるけど、これは。ハーレムいける?」

ほんとうに不真面目だった。

急展開。(後書き)

さあて。

ハーレムEDになった後個別ルート行きます？

いや、なんでもないです。

ハーレムEDがいや！っていう方がいらっしやいましたら、きちんと誰かひとりのルートへします。

どうでもいいお話。

ドラムがきちんと叩けるようになったら某笑顔動画にあげおうかと
模索中

ハーレム、というのは妄想で終わるもの(前書き)

久しぶりです、作者です

ハーレム、というのは妄想で終わるもの

あれからずっと考えてる。

でも答えは出てこない。

誰が一番好きかなんてわからない。

誰をどういう感情で見てるかも分からない。

そんな混乱の中、文化祭当日が来てしまった。

「さて…最後の、リハーサルやろうか！」

東樹の声に俺たちはうなずいて定位置に着く。

ちょっと、っていうか結構難しい選曲をした…が。

俺さえ足を引っ張らなければ完璧なんだ。

…落ち着いて。

何も考えない。

ドラムが好きって気持ちだけ、残して。

他は全部考えない。

いけるよ、な。

「背後には——」

「っはー！」

俺の脱力した声に皆力を抜く。

「1曲1番、だと結構切り替わり早くてあれだな」

東樹の発言にうなずきつつ、奈々が口を開いた。

「当日だからこそ、言うよ?」

「どうぞ」

玲が促す。

「えっと、好きです」

奈々が告白をした。

…。

なんで俺を見ている！？

「ん！？」

とりあえず驚いてみる。

「で…ね、えっと…玲ちゃん…その…」

今度は玲に向き直った。

そこで、とんでもない発言をした。

人生で、一番驚いたと思う。

「來、の事も好きだけど、はっきりさせたいから」

いつもみたいにどもることはなく、真剣に。

でも、震えながら。

「玲ちゃんが、好き。玲ちゃんが誰を見ても、私は気にしない。
でも、…えと」

…!?

君が好きで、だからこそ離れるべきなんだ

「えと…だから。その…そういうこと、です」

告白って、こういうものなのかな…？

あー…んー、と。

こういう気持ちが好き、なんてわかりきってるじゃないか。

自分が今一番一緒に居たくて、その人の事を他人よりもずっと考えてて。

俺にとってそれは、今も昔も桜じゃないか。

でも…。

俺は高坂の親友で、それは今も変わってないと思う。

だから、さ。

桜とは、離れよう。

辛いかもしれない、けど。

どう考えたって俺じゃダメだから。

同性同士は長くは続かない。

桜を偏見から守るなんてできないし、親を説得させる自身も皆無だ。

…本当は、期待させる言葉を言いたいよ。

でも、出てくる言葉は突き放してばかりで。

「奈々…ちゃん…?」

玲…は、どう答えるんだろうか。

彼女の期待に応えて、一緒に居る道を選ぶのだろうか。

「…っ、えっと、ちょっと外に行って空気、吸ってくる…っ」

多分、いや、確実に涙を流していたと思う。

…あーあ、どうしてこうなったかなあ。

当日、なのに。

俺は、きっと委員長、玲がなんとかしてくれると思っている。

出番まであと2時間。

俺と東樹は手を出せない。

これは、玲と奈々の問題だ。

恋愛というものは本当にめんどくさい。

てっきり、奈々ちゃんも來が好きだと思ってた。

体育の時とか、ずっと來の方を見てたはずだった。

おかしいな…。

私が好きなのは來のはずなのに。

どうして、こんなにも…

「玲、行けよ」

來の短い言葉が耳に刺さる。

「行ってこいって、んで、自分に正直になればいいんじゃないかな。
誰が好きかなんて、分かりきってるだろ？ 実際」

…そっか。

來の事、好きだって思ったのはすごいから。

いつだって、その笑顔で他人を励まして。

ずっと、見守って。

自分の不幸の上に立つ他人の幸せを本当に嬉しそうに見て。

だから。

優姫來という人間を私は好きだったんだろう。

人として、來だから…この子だから。

けど、私が見るべき相手は違う。

幸せに、笑顔にするべき相手は来じゃない。

私は――

――

「っはあ…」

つい、勢いで言ってしまった。

だって、だって。

玲ちゃんは私を見てくれない、いつも冗談で私に踏み込んでくるくせに…っ。

玲ちゃんは、私を知らない…私は知ってる。

いつだって笑顔で、周りを元気にして…。

両性愛者って公言して、偏見なんてしちゃダメなんだよーって笑顔で言っつて。

でも、実際ありえない、とか言われるとすごく傷ついて。

一人で、図書館で泣いていたのを見てから。

気になって仕方なかった。

玲ちゃんを見るようになって、分かってしまった。

來を好きなんだ、と…。

諦めたかった。

けど、好きなんだもん。

仕方ないじゃんか…。

いつも、來にだけすごい笑顔で。

それを見るたび私に入る隙間はないんだなって。

だから、だから。

言わないと、見てくれない。

答えがどんなものだってかまわない。

少しでも、來から外れて、私を見てくれるって。

けど、私が気持ちを伝えた時も…來を、見てたから。

ああ、これは。

私じゃ、だめなんだなって。

分かってしまった。

期待なんて、しなければよかった。

恋愛というものは本当にめんどくさい。(後書き)

もうすぐ終盤に入るんじゃないかなあーとか言って!なんつって!
↑

奈々ちゃんは本当にバカだと思うよ。

本当に、バカだなあ…。

なんで期待なんてしてしまったんだろう。

「バカみたい…ほんつとに…っなんで、諦められない、かなあ…」

小さく、つぶやいた。

彼女が泣いていたところを見た、図書館。

案外、見つからないんだ、ここは。

私みたいにどんな本でも読みたいって馬鹿じゃないとこないから…。

「っ…結果は、分かってたのに…ダメだなあ、なんで、かなっ」

届かない。

どんなに手を伸ばしても。

「好き、なのに。どうして…なん——」

「ほんと、バカだよ」

なんで、優しいの。

どうして、私なんかを抱きしめてくれるかなあ…。

諦めるなんて、できないじゃん。

私は、玲ちゃんが好きだ。

「1回しか言わないからよく聞きなさいよ」

玲ちゃんは、後ろから私を抱きしめたまま、耳元で小さくつぶやいた。

「私は、來の事を恋愛感情で好きではないから…奈々ちゃんのそんな顔見たくないから、笑顔が好きだから」

涙は流しても声は我慢して、邪魔をしないように、次の発言を待つ。

「私と一緒に居て」

その発言に驚いて顔を上げた。

玲ちゃんの顔が意外というかなんというか。

とてつもなく近くて。

「あ、あの、えっと…」

「どもるの禁止」

そのまま、塞がれてしまった。

奈々ちゃんは本当にバカだと思っよ。(後書き)

こういうのは書いてて恥ずかしいです。

最後の表現どうしようか迷って、それがさらにはずか(r y

∴ああ、こういう百合な展開身近で起きないかな、ぜひ写真に(r y

これが最後の、メッセージ。(前書き)

少し、前に回想のとき、かな
に、フラグは置いておきました。

これが最後の、メッセージ。

あれから1時間ちよつと、さすがにもう楽器を移動させなければならぬ。

のに、来ない。

東樹はちよつとつていうかかなり焦ってる。

「大丈夫だよ。だって玲だよ、われらが委員長だろ？」

俺はそんな東樹を笑いながら声をかける。

「…っはー、分かってるっての」

そう、絶対に戻ってくる。

だって、玲と奈々だもの。

どう見たって、どこから見たって、お似合いだろ。

「さて、書置きでも残して楽器運ぼうよ。俺、重いし…」

「…あー、俺も手伝うよ…っ」と

なんだかんだ言って、俺にとってこの空間が居場所なんだろう。

桜に対して、ちゃんと言わないとな。

俺は、来年から、この土地から居なくなる。

いつまでもうだうだやってられないから。

それでも、彼女は許してくれるだろうか。

…僕は、幸せだったと思う。

ああ、すっごい幸せだったよ。

「次は、友人を集めて組んだ、バンドによる演奏です」

予想通り、玲と奈々は一緒に帰ってきた。

手をつないでて、そんでもって奈々がすっげえー照れてた。

さて、と…。

「えっと、ここまで聞いてくれてありがとうございます」

「俺たち全員は個人個人でしか接点がありませんでした」

「それでも、一緒に演奏することになってから、ずっと一緒でした」

「人と人とのつながりっていうのは、僕が思うにとっても儂いものだと思います」

ちょっとした、演出、みたいなもの。

「だから…」

奈々が小さくつぶやき、皆はうなずいて。

『今いる、隣にいる人を大切にして下さい』

これは、ほんのささいな贈り物。

僕から、桜への。

最後の、贈り物。

これが最後の、メッセージ。(後書き)

これは一つの…悲恋の物語、ですから

幸せならそれでいいじゃない

「お前はほんつとうにバカだよ」

高坂が呟く。

「なんで、こんな大事なこと、黙ってたの」

桜が泣いて。

「生きる、死んだら殺す」

意味の分からないことを東樹が言っ

「ありがとう、ってちゃんと言えてないんだから、生きてなさいよ」

玲が強がって。

「死んじゃったら…一緒に、演奏できないよ…」

奈々が縋り付いて。

いつまでも一緒にいられない。

僕の運命は決まっていた。

確か、玲をいじめっ子から庇ったときに判明したんだっけ…？

おかしいとは思ったよ。

あれだけの出血で、倒れるなんて。

入院だなんて。

でも、仕方ないよ。

それに、後悔はない。

だってさ。

僕には好きな人ができて、親友の男の子が2人もいて。

同性同士の壁を越えた超仲の良い恋人と友達で。

生きてこれで、楽しかった。

バンドの演奏も楽しかった、あの後、6人で回った文化祭は楽しかった。

だから、これでおしまいでもいいんじゃないかな？

僕にとって、本当に幸せな。

人生でした。

桜、君が居て、本当に…よかったです。

幸せならそれでいいじゃない（後書き）

最終話予告みたいなの…感じ、ですかねえ…。

悲恋っていろいろありますよね。

失恋っていろいろありますよね。

まあ、こういうラストなんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7666l/>

あの頃に戻りたい・・・。

2011年10月10日10時38分発行